

「間柄」とその波紋——和辻哲郎・九鬼周造・中井正一

2008. 9. 21. 荻部 直

I 1933年のハイデガー・ショック

- 1924 三木清「消息一通」、田邊元「現象学に於ける新しき転向」
1926 三木清「問の構造」
1928 高橋里美、『存在と時間』を『哲学雑誌』493号に紹介
和辻哲郎、講義「国民性の考察」、講演「日本語と哲学」
1929 和辻哲郎「風土」（論文）、九鬼周造「時間の問題」
1931 九鬼周造、特殊講義「ハイデッガーの現象学的存在論」
伊藤吉之助、演習『カントと形而上学の問題』
1933 3/23 ドイツ国会、全権委任法可決
4/21 鳩山一郎文相による、瀧川幸辰（京都帝大法学部教授）処分の意向が報道
ハイデガー、フライブルク大学総長に選出
4 三木清「生存理由としての哲学」
5/1 ハイデガー、総長発令・ナチ入党
5/26 瀧川の休職処分発令、法学部全教官（西谷啓治講師を含む）の辞表提出
5/27 ハイデガー、総長就任演説「ドイツ大学の自己主張」
7/22 法学部教官12人の辞表撤回、反対運動収束へ
10/4-6 田邊元「危機の哲学か哲学の危機か」（東京朝日新聞）
10月 湯浅誠之助「独逸このごろ」（『理想』11月号）
三木清「ハイデッガーと哲学の運命」（『セルパン』11月号）
12月 大江精志郎「自由主義と自律主義」（『理想』翌年1月号）
1934 1月 荒木時次訳注『独逸大学の自己主張』（大学書林、独逸小論文対訳叢書）
1936 中井正一「さまよえるユダヤ人」

大学・学問の「自由」を超える、真の自由＝「自律」（湯浅・金子馬治・大江精志郎）
vs. 非合理性への傾斜、政治運動への統合を警戒（田邊・三木・中井）

なぜハイデガーは注目されたのか？

世界大戦後、危機と不安の時代の哲学

人間学（哲学的人間学）としてのハイデガー受容

マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』（リャザーノフ版、1926）

ディルタイ『精神諸科学における歴史的世界の構成』（著作集7巻、1927）

→Mitsein の主題化・生の強調による、のりこえ（和辻・九鬼、三木も？）
ハイデガーから出発して、「間柄」、社会实践の問題をめぐる考察へ
→そのハイデガーが、「行動的実践的なフアッシュョぼりの大学論」（荒木「訳者序」）
を表明したことの衝撃が、その後の和辻・九鬼・中井の思想に刻印をのこす

II 和辻哲郎の「文化共同体」

瀧川処分には冷淡（久野収）、美濃部事件にも特に反応せず

「大東亜戦争」の開戦目的には期待（古川哲史）、齋藤勇を非難（堀豊彦）

しかし、陸軍・日本主義哲学派・皇国史観派との確執（日本諸学振興委員会、日本出版文化協会）、津田左右吉弁護

『人間の学としての倫理学』（1934）から、『倫理学』上・中巻（1937・1942）と『尊皇思想とその伝統』（1943）への変化——中巻「人倫的組織」論の重要性

文化共同体としての「民族」と、強制機構としての「国家」の区別

→「団体の意志」の「権威」による、「権力」の統制

重層的な人倫組織、その総体を「外護」する「人倫的組織の人倫的組織」としての国家

家族・親族・地縁共同体・経済的組織・文化共同体

実践的・行為的な連関としての人間存在の空間性

「主体的な広がり」＝公共性＝「あらわになる場所」が、より大きなものへ広がる

→交通機関・通信機関の重要性：布教者・琵琶法師～鉄道・新聞・ラジオ・電話

最大の広がりを区切るのは「言語の共同」＝民族（not「血と土の共同」）

人倫組織の中での「文化共同体」の重要性

役割・資格＝persona に解消されない「真の人格」、「友人」としての交流

藝術・学問・宗教：孔子の「朋友」、プラトンの学園、芭蕉一門、心学結社

「学校」における「友人的存在共同」but 力点は、学問の「民族的性格」

III 九鬼周造と中井正一——「自由」の伝統へ？

ハイデガーの「歴史性」への問い・存在論の歴史

和辻「国民性」、九鬼「日本的性格」、中井「日本の美」：より風土論的・連続的？

九鬼周造「人間学とは何か」（1938）の問題性

天つ神→イザナギ・イザナミ、アマテラス→ニニギへの命令

＝国家主権、「我国独特の國體」、天皇親政の起源 cf. 和辻の「尊皇思想」論

but 「原始偶然」としてのスサノヲ→和辻「清明心」論との対照

歴史の創造者としての人間——「自由選択」が人間の本質

「人生観」(1934)

『「いき」の構造』(1930):「自由の擁護」としての「意気地」

～「他者との共同存在」を前提としながら、共同性へ回収されない、「二元性」の緊張を保つものとしての「自由」←「偶然」への驚き

cf. 「時間の問題——ベルクソンとハイデッガー」(1929)

「前走的決意性」(vorlaufende Entschlossenheit)における「死への自由」の自覚(Freiheit zum Tode, Sein und Zeit §53)に注目、「時間が自由の基礎をなす」と説く点に、ベルクソンとの一致を見る

伝統的美意識・倫理意識への問いかけ——中井正一『日本の美』(1952)

鳥羽僧正『鳥獣戯画絵巻』の「自由」「いき」「脱出の精神」

中宮寺半跏思惟像の「白い刃がひらめいたあのような線の美しさ」

→モダニズムの「切断」の美との共通性

すがすがしい「戦慄」から、現実への批判へ……瀧川事件、『世界文化』『土曜日』

～不断の提案と討議による「委員会の論理」(1936)を支えるもの

* 引用資料

[1]右の[ヘーゲル]弁証法に対して、日本の哲学界の一方の主流を成してゐるのはハイデッガーやヤスパースの実存の哲学であらう。この国の現象学徒の関心もフッサール、シェーラーからハイデッガーへ移りつつある様である。ハイデッガーがナチスになり、フライブルグ大学の総長になり、その就任演説『独逸大学の自己主張』が田邊博士が『東朝』に載せられた分などに始まって相当強い関心をこの国へも捲き起しつつあるのも最近の事である。(小松攝郎「一九三三年日本哲学界の回顧」、『理想』45号、1934年1月号)

[2]而もこの講演が行はれた頃は我が国の論壇は例の瀧川教授問題を中心として喧噪を極めてゐたことを思ひ、且つ大学の自由の問題はこの瀧川教授問題の故に大きな不安の中に追ひ込まれ、今日に至るまで未解決のまゝ残されてゐることを思ふとき、この明快な大学論はこの問題の解決に一つのヒントを——それが如何なる方向のものであるにせよ——与へるものとして熟読に値するものであることを信じて疑はない。(荒木時次「訳者序」)

[3]フッサール、ハイデッガー学説の美学への示唆は、すでに時間の中に寸断され細片化された自我が、宇宙の本質の中でいかなる現象としてあるかを記述し解釈しようとするのである。ハイデッガーは数年間の塹壕生活の前後十年間沈黙し、前著『ドン・スコトス論』とほとんど関係のない『存在と時間』で突如として、不安の哲学を投げだしたのである。

彼の哲学の中には一九一八年の痛みが深くきざまれており、塹壕の中の単調の存在 *auf der Spur sein*[ママ]からのうめくような脱出の願望が味わわれるのである。(中井正一「現代美学の危機と映画理論」、1950年、『中井正一全集』第3巻、美術出版社、186～187頁)

[4]なほハイデッガーは、現存在がその出会ふ存在者に対して距離的である意味で空間的であることを説いてゐるが、この点が問題の中核をなしてゐるやうに考へられる。……ハイデッガーが公開性を有する配慮的時間または世界時間を非原本的のものとするのは、共同相互存在の説にも拘らず空間の実存的展望を封鎖するものではあるまいか。共同存在性が終始一貫して視点を離れなかつたならば、現存在の関心の存在学的意味が「時間性」としてよりはむしろ「時間空間性」として開明されることもあり得たのではあるまいか。

……彼の哲学に接する者は誰しも *Sorge*[九鬼の訳語は「関心」]の体験的気分的意味が強い余臭を与へてゐることを否み得ないであらう。……ハイデッガーの哲学に世界大戦直前の不安、心配、憂鬱の反映を見ることもあながち不当とは言えぬであらう。「死」の哲学を「生」の哲学であらせざることを希望しても必ずしも不都合ではなからう。ニイチェの明朗に帰れ、否、エピクロスの快活に帰れといふ言葉をもつて結語の結語とすることが許されたい。(九鬼周造「ハイデッガーの哲学」、1933年、『九鬼周造全集』第3巻、岩波書店、269～271頁)

[5][日本語の一人称、「僕」「うち」「われ」「おのれ」などについて]この様に言葉として単純であるべき *Ego* が、日本語に於ては、*Öffentlichkeit* から、社会関係から、*Wertung* から、*praktisches Verhalten* から、*Dasein* の *Räumlichkeit* から、又更に *Mitsein* から、解釈すべき様な意味を含んでゐる。(和辻哲郎、講演メモ「日本語と哲学」、『和辻哲郎全集』別巻2、岩波書店、361頁)

[6]……然しあくまでも有の理解を介してのみ他人が出て来ると考へたところに、現有の存在構造の分析の著しい限界がある。それは理解の根柢に存する間柄にまで遡ることを許さない。存在構造の究極の問題は我のみの存在に於て取扱はれ得る時間性的の問題に局限せられ、人と人との間を構成する肉体性は無視せられて了ふ。人間の存在は死すべき我の存在であつて、生命を生産する間柄としての存在でなく、またその存在の特徴は単に有論的たることであつて、実践的・行為的・創造的・生産的たることには認められない。(和辻哲郎「倫理学」、『岩波講座哲学』第2回所収、1931年、103～104頁)

[7]ハイデッガーにとつても人間の在り方としての「世界内存在」は「共同的世界内存在」にほかならない。世界への内在は他者との共同存在であり、現存在は共同相互存在 (*Miteinandersein*)の在り方を有つてゐるのである。和辻哲郎氏が人間を原本的に人と人との「間柄」と見たことは、ルヌーヴィエが一切の範疇の根元に「関係」を置いたことと共に興味ある見解である。モンテーニュの「人間学」からコントの「社会学」への発展は必

然的である。(九鬼周造「人間学とは何か」、『九鬼周造全集』第3巻、37頁)

[8]現在の学校は学問に於ける共同体としては非常に缺くところの多いものであり、むしろ打算社会[Gesellschaft]的性格を露出してゐるとも云へる。学問は生活の手段となり、学校は職業のための場所に化してゐる。学者は学問的探求に於て合一しようとするよりもむしろその地位のために競争し、学生は知識への要求を共同にしようとするよりもむしろ就職のために腐心する。その結果学校が絵居る事業としてさへも経営される。しかしこれは学校がその本来の意義を失つてゐると云ふことを示すのであつて、学校が本来かくの如きものであることを示すのではない。……学問の共同体として缺くところの多い現在の学校ですら、なほ友人的存在共同を媒介する場所として、有力な役目を果してゐるのである。(和辻哲郎『倫理学』中巻、岩波書店、1942年、424～425頁。岩波文庫第2巻430～431頁)

[9]物理学者と雖、物理学と全然縁のない区別、即ちドイツ、イギリス、アメリカ、日本等々の区別によつて区別され、さうしてその肩書の下に取扱はれる。といふことはそれぞれの学者が単なる個人としてではなくそれぞれの民族の物理学的尖端として取扱はれてゐるといふことである。従つて世界の学界とは民族と民族とがその学問的尖端に於て学問の共同を実現してゐることを指すのであつて、決して超民族的といふわけではない。(和辻哲郎『倫理学』中巻、394頁。岩波文庫第2巻406頁)

[10]原始偶然に当面して、人間は驚きの情に充たされるのである。そして、この驚きは、具体的には次のやうな幾つかの驚きを含んでゐる。自然的人間は何故に生れ、何故に死ぬのであるか。何故に自分は黄色人として日本人として生まれて来たのであるか。何故に自分は「この」自分であるのか。……「光華明彩くひかりうるは>しくして六合の内に照り徹らせる」天照大神が、何の故に、「悪しき態止まずてうたてある」須佐之男命のために悩まされ給うたのであるか。……これらは人間にとつて謎である。この謎を全面的に提出するのは形而上的人間である。謎を解かうとして絶えず悶えるのは歴史的人間である。謎に直面して身を顫はすのは自然的人間である。(九鬼周造「人間学とは何か」、49頁)

[11]自由といふ意味は色々に考へられるが、人間の実存を成立させる自由は選択の自由でなければならない。甲か乙かといふ選択に直面してその選択肢のいづれかに決定する自由であつて初めて実存を構成することができるのである。……真の自由は個々の行為の選択そのものに存しなくてはならない。自由なる行為は性格を造ると共に性格を毀ち得るものでなければならない。自由は瞬間瞬間に行為を無から創造するものでなければ本当の自由ではない。従つて自己とは実体のやうな単なる連続ではなくて、非連続の連続といふ構造を有つたものである。(九鬼周造「人生観」、『九鬼周造全集』第3巻、100～101頁)

[12]そこには世間には自由がないが、それぞれもとめ、もがいているところ、そのところが、この一巻きの絵巻きものの中だけでは、その自由をほしいままにし、その自由を得て、うさぎや鹿や猿と共に嬉々としてたわむれている。こころゆくまで楽しんでいるのであります。……すべてこれ、きれいで、さっぱりとし、軽く、柔らかく、流れ動き、清く新しく、常に濁りと汚れと、重さから脱出せんとするところの、脱出の精神と行動がみとめられるのであります。(中井正一『日本の美』、『中井正一全集』第2巻、美術出版社、229～230頁)

[13]浅い河で流れる水のもつ「いさぎよさ」「軽さ」は、決して軽薄なものではなく、みずからの否定、みずからよりの脱落、そこには大いなる現実への絶望から生まれる、深い強靱きわみない願い、そこには、息をのむような深い行動と、鋭いものがかくれていたのです。今まで自分を支えていたもの、その断崖から手を放ったものが、刻一刻の落下、落ちていく速度、速度から生まれる、新しい自分の速度に驚くとでもいえまじょうか。この戦慄、身をふるわすものの中に、初めて、この「新しさ」「すがすがしさ」といえるものがあらわれてくるのです。(中井正一『日本の美』、257～258頁)

* 参考文献

- 家永三郎『田邊元の思想史的研究』(法政大学出版局、1974年)
小林正嗣「マルティン・ハイデガーの政治思想——『言葉の本質への問いとしての論理学』における「民族」概念の解明」(政治思想学会『政治思想研究』8号、2008年)
茅野良男『人類の知的遺産 75: ハイデッガー』(講談社、1984年)
佐藤卓己『言論統制』(中公新書、2004年)
谷崎秋彦「ハイデッガーの自由論」(『倫理学年報』38集、1989年)
西野真由美「倫理をめぐる」(大橋良介編『ハイデッガーを学ぶ人のために』、世界思想社、1994年、所収)
古川哲史「和辻哲郎と大東亜戦争」(湯浅泰雄編『人と思想・和辻哲郎』、三一書房、1973年、所収)
堀豊彦「斎藤勇先生追悼」(東京大学学生基督教青年会『会報』78号、1982年12月)
松尾尊兌『滝川事件』(岩波現代文庫、2005年)
鷺原知宏「ハイデッガーにおける真理と自由——超越と根拠」(関西大学『哲学』21号、2002年)